

カルテ

KARTE



4月の骨粗しょう症の超音波検査でOSI（骨の強さを示す音響的骨評価値）が2741、最高比102%、同年代比125%だったのが、9月の腕のエックス線検査では骨密度0.276g/cm²/平方センチ、若い人との比較で59%、同年代比86%でした。こんなにも減るものでしょうか。（75歳、女性）

骨粗しょう症の検査

「質問に対する回答」としては「骨密度が5カ月間で大幅に低下する可能性は、特殊な例を除いて低い」と考えます。つまり4月の段階から若い人と比較して59%ぐらいであった可能性が高いと考えます。

骨粗しょう症は、骨強度が

収法（DXA）や手部エックス線骨密度測定法（MD）、定量的超音波測定法（QUIS）などがあり、骨粗しょう症の診断には通常DXAが用いられます。QUISは腫で測定され、確定診断には使われませんが、エックス線被ばくがなく、簡便に評価でき

質骨は硬く、強度を保つ役割を担っています。2つの分布は身体の部位によって異なるため、検査の数値の違いにつながったのではないかと考えます。

評価が最も推奨されています。今回は上肢の骨密度でのご相談でしたが、一度腰椎や大腿骨の股関節側部位のDXAを測定されてみてはいかがでしょうか。

（兵庫県整形外科医会、大西政彰 〓西宮市、兵庫医科大病院）
◇第1、3、4日曜に掲載します。

腰椎、大腿骨エックス線測定を

低下し、骨折リスクが増大した状態です。骨強度のほぼ70%は骨密度により、残りの30%は骨質によると言われますが、骨質の評価は難しく、その割合からも骨密度が重要視されています。

骨には海綿骨と皮質骨の2種類があり、海綿骨はスポンジ状のしなやかな成分で弾力性を保っています。一方、皮

骨には硬く、強度を保つ役割を担っています。2つの分布は身体の部位によって異なるため、検査の数値の違いにつながったのではないかと考えます。

また、DXAの中でも腰椎と大腿骨の股関節側部位での